



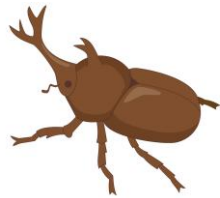
夏見台幼稚園・保育園 ニュースレター 2024.1.25 号

園主の鳥居徹也です。夏見台幼稚園・保育園でのこだわりをニュースレターにまとめます。どうぞご覧ください。※配信停止の方はお手数ですがメールまたはお電話でどうぞ(info@trepont.jp まで)

〒273-0866 船橋市夏見台 2-16-1 夏見台幼稚園
電話:047-429-7231

「攻撃性」をうまく処理できれば

園にたくさんカブトムシを提供してくれた人がいました。東金の山奥でとれたというその虫たちは大きく元気そのもの。さっそく子どもたちに見せ、私はその場を去りました。



少し時間がたってから戻ってみると、数匹のカブトムシの首と胴体が離れていました。いじくりまわしていたようです。

子どもにはこうしたある種の「攻撃性」がしばしば見られます。私も幼い頃、虫をいじめていたことがあります。ストレスもあったのでしょうか。

今回はその「攻撃性」について考えてみたのです。人間には生存本能があります。自分が生きるために「食べる」。食べるということは、他の命を奪うことです。最近はそれが嫌でベジタリアンを選ぶ人もいますが野菜も生き物です。だからありがたく「いただきます」と最初に断りを入れるわけです。

男の子のヒーロー願望、女の子の王女様願望の背後にも、この攻撃性が潜みます。力へのあこがれ



です。

攻撃性は悪いことではありません。ヒーローのようにふるまい、悪者を倒す。王女様の装いをして、周囲にアピールする。

こうした幼児期のごっこ遊びを通して、秘められた攻撃性を上手に昇華できればいいと思います。すると**その攻撃性が「生きる力」として、性格に統合**されていきます。これを「意欲」とも呼びます。

「本当に満足した子どもだけが意欲的になれる」

そのようにお話ししていたのが、児童精神科医の故佐々木正美先生です。子どもの秘めた攻撃性の昇華をわかりやすくあらわした言葉です。私たちの園でも園内研修にお呼びし、多くを学ばせていただきました。この文章をお読みのみなさまも、機会があればぜひ、佐々木先生のロングセラー『子どもへのまなざし』（福音館書店）をお手に取ってみてください。



その佐々木先生のお話の中に、次のようなものがあります。当時、子どもを対象とした精神科は少なく、佐々木先生は東大の精神科で診療していました。

東大の近くには東京藝術大学があります。藝大の学生も佐々木先生の患者さんでした。ただし、絵画を専攻する学生は皆無だったそうです。患者はほぼ音楽を専攻する人たち。

それを佐々木先生は次のように考察しています。

**絵を描くことはお金にならない。
親は絵描きになることを推奨しない。だから絵画を勉強している人は本当に好きだからやっている。
しかし音楽は違って、親が無**



**理やりやらせている場合がある。
子どもの本心ではないことがある。**



ゆがめられた攻撃性が内側に向かうと引きこもりとなります。外側に向かうと暴力性を伴った非行少年となりえます。やはり攻撃性はうまく処理したいものです。

ところで最近、若者たちの中で医薬品のオーバードーズが問題になっています。依存です。依存もまたゆがめられた攻撃性の一形態といえます。

SNS、スマホ依存もそうですが、こうした現代社会における依存の背後にあるもの。

「本来追求し続けたかったその情熱がとん挫し、その代替品として薬物などに方向転換する」

といった解説をしている本を読んだことがあります。子どもの意欲を上手に開花させてあげたいと思います。

女性にももちろん攻撃性があります。しかし女性は社会通念上、その攻撃性を秘めがちです。これは大昔からあまり変わらないようです。

中世騎士物語のアーサー王伝説の中に、『騎士ガウェインの結婚』という話があります。以下のようなものです。

囚われの身となったアーサー王は、助かりたいなら次の疑問の答えを探してこいと告げられる。それは「**すべての女性が最も望むものは何か**」。約束の期限まで、答えを求めてさまようアーサー王。そしてようやく、ある老女からその答えを聞き出します。それは…

「あらゆる婦人の切望は、『すべての女が自分の意思を持つこと』である。」

中世の昔からそのようなことが言われていたとは驚きです。美や富や若さよりも「自分の意思」。

それは死に直面した人々でも同じ様です。これはオーストラリアの終末期専門のヘルパーの仕事をしている人が書いた本です。

『死ぬ瞬間の5つの後悔』（新潮社）には、今まで接してきた人々の「最後の告白」が5つの章に分けて書かれています。

死に際の最大の後悔と何か？お金？成功？人間関係？愛？幸せ？…答えは「**勇気**」です。



「私、どうしてやりたいことをやらなかったのかしら？ どうして夫をのさばらせていたんでしょう？ どうして強くなれなかったのかしら？」グレースは勇気がなかった自分に猛烈に腹を立てている。

結婚して50年以上、横暴な夫に耐えてきたグレース。その夫がようやく終身の老人ホームに入った。長年待ち焦がれてきたこの瞬間。しかしほどなく、不治の病にかかっていることがわかる…。

「自分に正直な人生を送らなかったこと」というのが、ベッドの脇に座って聞いた一番多い後悔であり、教訓だ。これは気づいたときにはもうどうにもできないので、他の後悔よりも怒りが激しい。

著者のブローニーさんの考察です。生命にあふれた幼児期とは真逆のテーマを扱ったこの本から、子どもの意欲を育む大切さを再認識しました。（終）